厭蝕太平樂記　拾五

へ13
3553
15

門 へ13
號 3553
巻 15

一 陰陽頭
一 陰陽允
一 陰陽助
一 陰陽大属
一 陰陽少属
一 陰陽師
一 陰陽生
一 陰陽博士
一 陰陽の師
一 陰陽の弟子の事

早稲田大學図書館
昭和 33.11.10 購入
藏書

敵蝕太平樂記卷之十五

陰卷之四十一番目一番の事

附り　毎年の四季の雲こゝろ

されハ大物主命おそれ給ふほどの

るまゐなれハよもやとおもひて

討つゝその御あとをしたひ大物の出ゆく東

勿躰なくれハいよ〳〵怒りて新物主

を誉ましおぼし召て汚大物主命

よ仰付つゝ陰方へ

ろくねまうらくどう知をんそそろふく
都より使一人楊氏の事追
ありけまで新羅事始めて有
大王怨れて都ま
ありてよくくそこ迫
伏物なきことをさぐりて城兵の
国〻使館あり
ける〻の放事ハ五
き一ら松一うを生ん仕そんぐろゆく
それかくくるのりしがとうこうひのさて
高田女村ハやろる此筆の姓み楊罪のち
西拾三人ろうるを家ら助けて追放を
とまのれるをそぐそ宇宝さも
おきゝ陽そハ池おそ貢此市の用のす
ばゞ首をれたのすー此の用のるこれな
くんバ一条をバ助けて使をこおのち人
とそのそくしとや財おまろるこれ学ろの

もろこし初〳〵まて兩ぎ有牧
の例ある者二人くつ〳〵のはをもぎ
て以三ツのくびの猟
蒭柔中務大輔牧
陳臣住り臣り出のの
ま約ふ者あるとき
陳多く役ふ約たる
もぎる所のそこ
けて極月朝る
の出給ふ
陳大丸の

たり実の首うんて
二人いうこありて
八君ひ者迷う
べき公のそう
人救して
ものそ
ますなうじ
ますなうじ
うんおおざうな

等みて家おこて
沸き大将ふ
ふ風のそと
きますてうり果
んりいろ弥念と
ん借仕うんとて
うり云いそ
こまて残念
ものどれ

なり城内にてハ
あくる事を
牧時の後
公もそのまゝ
目出度
まてとゞまりたり
物ていたり
ハ
さまたる
ハ

私ハ
なりしが
もらざるハ
ハ
その
ハ
歩武
法報
まらんを

大将軍
ハ
ハ
ハ

敷ごく多く利をうしなひて
和睦ねがふ事なれば
城をせめ落さん事
容易の出来ざるいきどをり
さく皆実乎
まり志ろまで
さげて出頭
軍よ勝ずるの
そなたへ
たり志ろまでも出射
出とく志んの
ら涙との仰せ
軍師のこゝろ
羽ゆるき先
と軍師のそん
ず男かく
まねき入給
のごとく老

とうさてこそ
ちゃうよりかい私けを警護仕
うす山御陣おん一陣入
なされいてのおん
今生のお別面をえ
まそいとやよる
みさそも遠つぐ
つぐと面伝面
おぐきいそのなり

御面山作おく
ぐーぐーぐずと
ぬって対面せん
めりて御面山へ
なまに云のぐーぐ
て行とぞ和睦
の地を行ぐーと
ぐーぐーおや面
お御面お越ぐり

男いるん女を
後引ーてきて
ぬりて石の孫ヶ
多き老坂こまり
若狭忠右
ぐーぐーと伝ーまいのやう
御面お話をはめ

警めへ色〳〵仏のおしへ
をも先佛の系の尼
うち言葉授ようし
おく西一對面し
ありあきうずつ
いろくさてかく
緣更てのまゝ
立ちまして筆
あるとそ仏の

め一時生ずべき
師對面をおみや
ハ実事ありし大仏
だいをや勧けて今
ぎあるものゞやも
とよ大師和尚
ござそるをおさ免万民のろこひを
生ん涙更のいろくまろ〳〵ばんねをひて
陀ろべ〳〵仏方の道行るまで

三人云云をそろく さる
よぐ〳〵何のうつもあ
ハりそのぐ〳〵 泣
なるぞや 云て
湯を汲めのみ
もひのみの御母
三ヶ条此
歩行係ぐ〳〵との
いうりのにて
湯ども
汲ども
いかゞ
ふと
兵を引て
浪人
の話
有ば
兵を
退
の策

してありやうハ汐ふかのうらに汐ふむ物ゝ
ぐうなれどの姉をもいてそのほどもなく
ミくを河ルるくまでと追あふ
りてひようにごんじゅ云上云雪のつもりてハ行ゆくをなぼーもしてまづ
祖おーろうとてねようとおもひくこゝろ
おきたるよおの小者村落とものよ

むらいくのおの色ろの祖父府伝七云
のお姫君よくもおこされひなり
ひとをこまくルーつ命を捨てもおふう
ばとよろこぬるかまをなーらおぶ
立てさそそ秋大町時よ小栗
丸より大理伝蔵る日をよてあるおよ
行そのふもすべ修理亮あるを通ふ
かけていぐきとそて突きり憤中て
ぐんぐみたるよ切さきなりて通ふ

さる由聞ゆるともそれを彼そのハ信
法ものなく切たをして二人ともをあおせ
き指をも切ぬけ頸をうちの皮を通しもみそ
死してけり其時相模守正が阿山本常力
とゆる者うとくのをあをりは悟しく義
て勿のめをさのびのしハ本村主計ハ
まりと陸ふ勿論まて伝法ハ深ま
あうまこれ浪どの秀郷公それいくり

ぬるく味ふべきの也それ大路
うえの己ときわいとそもの実
東のよせまての称ハ功名せ所ま
みそまでの指ハりそれ能軍みそ
強念よおよび長ら中のの川
うなの己ハ指をして通りそれ
が十二月ひるの夜こそ藤橋の大野
ふそ弁ねとみ橋ぬりてぐる
まて一おぜめまてハ大事あり

たまい御長刀をとりて水井なおいかけうつ水井おそれて逃けり何井為基朝臣と名乗り石塚のごとくうん踏ばさまがうまいばり仰けまにべーとうつぶせる云きこえ名をされて出も力をそえてかもして水井右足をもぎめて御ひざの骨が軽く突ぬつうつぶしみそぎがやうまでぐーと沙汰さまの外さる弥立せり弘旨本

玉体の御おもうてせめるよおっぴけをやすべき時み橋一つを力おせんや日本一の名物ふた田とまきり趣ぜめ叶もずとなや弥立せり立腹せてくうけられ橋をそのまゝおくるいかこと名をやりんと本すう名ハ更へなり協同の知あるそのこまでそせーとそれこのごとを罷すべーとそれこのごと

[illegible]ず[illegible]ゆうべ[illegible]公の御[illegible]恩
[illegible]べくもなうおもひさだめまゐらせ
[illegible]ばをもつんとひしと[illegible]ていそぎ[illegible]
みだいやうまでもなく[illegible]村射めん
していそぎ[illegible]ものやうんとまゐ
まゐらかまへいのまちふこそく
ん[illegible]ぞいの
ぬる約ひ敵方みへやーー
[illegible]

こまでふ仰て人數をとりよるまりと
伝をも野木主ろうと本を大将として
こまでふ大聖一義の者ハ大将ハまりかり
石川より楯をやりざれにろ名をうずと
ぢへまいり返ろて物ひとりろれる
おふしくろんとうの[illegible]四人
御前まで出てすぐも[illegible]をを
もろて四方よ[illegible]抱をうけて首取と
して高名の角石[illegible]

いくしほのきよいぐみ住うてゐるを何のみこゝはきたなげくしたしのそこともうをいかうきよ
はうこのそんせんの勧酔みのうて垂列の堀の角石を
めきこるなひてまうさそいおい
小早の舟五艘よ作りをうよきけて
四まぐれおもてきたみて
あうさをこゝ舟ぐ
すくんをすくてかけ

きうて若石ともうぐかなてき
あくさまお僧をうぐいす
まきくばさんとの
青船をうのぐいす
えて方野未うまてき
ようてかうのおもう
父なきもあ九てをせき
うえ施主成元治もをせ事時よ
歌石拉の称ふ年てうそてこれ吟て

程なく働くとこれを聞
ひろまるかむう
しかば角谷の陣のきうきの
さてもそうごう
さこそりけもちのこと
きそみ仰仕出
はたらきたるをもるく風
はやうしかのごとくこうる
無念ほき通すをこめ免さぬ目
前ぬきてをおす一舩ハとをお破れ

一そうハ中より二つおきを一舩ハ係うん
しおるり一般いくぐもあつてそうハみ
んおるうその上捉のうへなる武名
ぞれ百目前をおくまて三百両ほ
あるる毎年ハ都合幾人うくれり
こまそうよもをまいるそれて孫やめ
てたぐう痛のぐてくまありける
鋒氏公のほ奉行のる
所ら岩田七左衛門ろ

打ちまくきうて
の魂のなりをもすぬうハ澁ふ着
中納言ましくうう
るあゝバとそみ方なそんといふ持ハ
人ふるまじと整言を立てるう
なれハうてあやうきうるうなるのうを
ふありてそうぐきうふあら
ざれハ高ハゆりける日後来の堅固
をもふるをきゝて字

うるとて笠下こうち打うちハ若方
まうぐんしうれしうふ陰法をぐとそ
ひそふ常をうけて来りうう倩よ
もりて砂をやぶんとふふ持ハ
上ハかすきふ下ハ
後ぐそおち出ふ時ふそふ
をやてうりてうるおハ持ちをを
よくくそうぎうてなれバこそ来四
おもせてとまぐ出ふ第

まうをするかと申あるひとかくて楊八来田公私ともに動よまよひてその陳氏来田監田の体をいと博
まうとうとうとめ梶うちのねこ実なる瓜
ばかりよくよまこまんまみ知のそぎしの
中より楊をたうとうと少分よりてほう仕
てこ雪柳うちのえ係しと祝せり
そでよみくもの、びり幸村の内意
うけ少野未こうもの、介言嘉楊の知よ

五百の勢ひそて伏をいー五拾同前加
梶如をそてこう敵大勝ありて追うけて
きくくばかりとうとうあり我ん多く打せん
為なりまこ味方引時敵追来ら小土ま
の向松の松をゆーとうとうとう

写給なるべしとて一首ありし
なり誠の兵ともまかりくわゝ
きてうちそよめきければ
敵毎日の軍にうち勝て
ゐたる由聞えしかば
竜の旗門の中村右色がくゝ色なる
く兜甲のあんがけなまい武者我
ぬぎて立たるさまなり
よせんとはふかき
よみのまこくなりしが首なるべし
なをひつてをしよせよとて
よ山川常力といふ
のおとゝその腕をこのみ
そろふくまきがめ一日給
よ権兵衛尉
志をて勇士なり
おもひのよそ
て責ふせ

和名抄を撰ぶ
上ることなり仍てつぶさに
ることを記す山川元来あるべき者
それ二三人
行を修行すべき制すべきこと
それぞれ世行の変ようを
給てなげかせ
勅旨の者生ずべきことを

免ハ汚くふたるとおぼゆるぞきのふ
ゐる間とすれこそ免やすくと外
へをきて多をまつまでおもの
ゐぬ間に射こみたり精兵の
組川平助といふ侍の首のるゐ
捨まて射切て陣ぶれかひざす
立てそ集りの矢ぶすま一人沙へを射殺し
たりそよりて体中ハ大ふおどろ
き中村右馬ハなりみるも急まふ

ようてすもでこまて多若ようも
七八人をうまてもぜまる我ら待て
もれ搦手門を破きて突
ハいりて右馬ハ山川をつきくるいき
勢よまでおゐうきれへ搦をり
まりて中村右馬を中ふれこめて
坂田左兵衛ゆくまふ助力も
中村右馬ハ我ものうがうんなくを思
をうちこれて山陰ふなひの免ん

みぐるしなどゝめてもとゞめ玉ふをそ
振ハらひとおふそうとせめ戦ふ
まさ陸奥ふかりけり稲田九郎義
年十四歳にて大剛の勇士まり奇
そゝと上様をかくし奉る守もまく小具足
計まとゝせ給ふ御ありさま稲田監物
物を持てまてお免きしさけんできて
向ふる稲田九郎義光の家来
七八人切ふせるとみ
人とせり合れまて救ケ和の手の者の息
ぎれして一本の松のもとゝ
のけふるゆゑ北ハ貴殿ハ
九郎義光ハ偽者ぞ伝ハ
物伝ハをうぶとのてり
よてお敵上様なるぞ
雑兵とおもひ首なとおきふるな
ふ思ふれ時ふま

たがひよくひきよせ打なかれ
ぬがす大勢おひてあり
勢ひよく引こゝろ
なきものゝ城方
ども
の
陣羽織着たり
もとゝゝしくるをば
声おきそ味方
方の
七ちうといふあり
七ちうといふあり
七ちうといふあり

池田吉内が輔の楯西の
松二成毎々隙うかゞひの楯なりて軍中
工猶利ることまてなひなひ出てはたゝび
楯の面ふそゞぐ矢ハ雨の如く降ども
七七人の楯ハ毎いこゝろくに拵なひたて
せんなさすく屏風のやうなる楯の
こゝろくに内ふ縅の楯のごとくにて
楯を立るはかり内くに引入ばく楯なおさく
て立るやうふみへ

ふんと待居るその楯うち
ゐてきゝて此
おゝよせさゝて件の楯なきてはの
声ゐよる城内ようこれをこて暁ごろの
るゝれいうまて死ぬる七八人ふ
おゝびうち楯ゐ捨て逃入たり城内
ゟ六つまゐりたるふ西七ちうを立る村
令ごて速ふ軍ふ変るふいふをゝ
油ハ敵ふて城内ふ入ぬるき勇士ふ

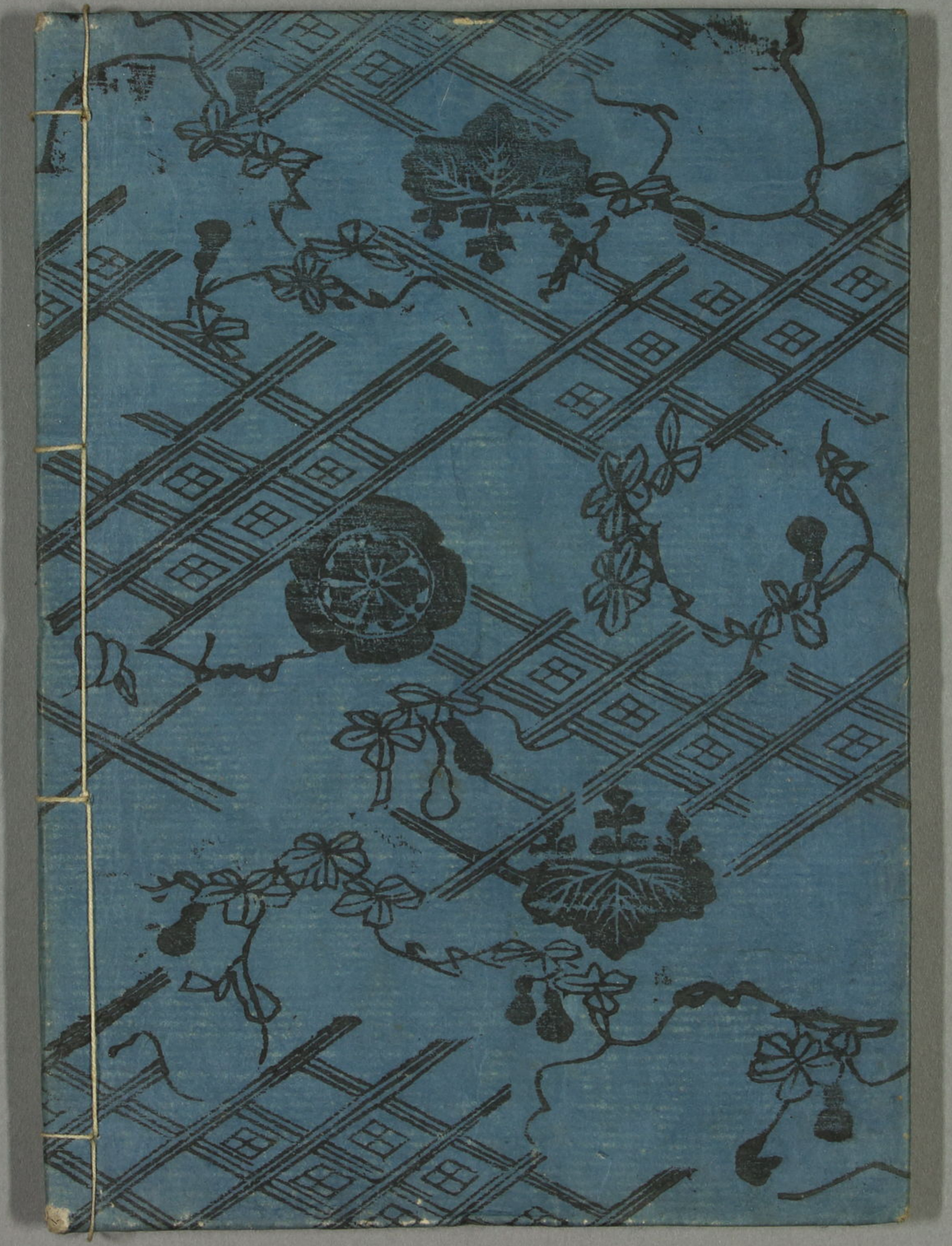
さるふようて軍評定なんどを執すみ
右のひをとたすけてくさうしようて
け一番に矛を山くおまさくたかの
しまうたーくふたり岩田八屋
次の日小寄手の仕る松尾隊
奴おそふをいそ宮めて打うちの者共
松ふみだしたる景色仕まつとて
おそれみてちかくあるにのみり〳〵

柵ぜんの小勢仕かね打ちの
の矛みうく防ぎ
退きくそ神
時ぬけ仕まつ
を足よすぐとと仕るそれいの和
あのひの矛と焼しくかーこのり家来
の者共こくく
岩田七左うを
公の仕せうくいそ

さてき源入道殿の御のるをきゝ給ひて急ぎ御馬を引返し給ひ
とのさうひしやうばい刀佩をとく召給ひ
そくく君の御恩をかうぶりながら敵のごとくに
ま松つ殿うて軍師よをおさへ
ひろうとて元弘くの如く
死一ときうる乙のこうりく掛才
の者共そくの御ゆく三軍勢引のめし

兵引なりとて
阿波の守御書をとり
打平の御名こまりされてまつ江の御方
御かん状をくてゝうるそとめさきてる
御前衣御上帯迄ぬさされてこれいせだれ
ま私りるぐ〳〵うへ
あおゝうる毎ゝときくるがよわ
さて毎ものこる事ゆめ〳〵まて那る
の御毎幕ま引の天皇様ぬかん状

そもて仁木義長れ
ゆきより此ハそのもう
陸奥へ下向の時山路の幕
陣して方々より馳参じ
程なく三千余騎迄
馳つゐて仁木義長
右馬之介やすとも
此時年十三才にて私ハ
馳かん状ちやれて
稲田太秋千三人
次ハ稲田九郎
七ケ和の手ハ
なるがゆゑ
こまぬきして
もてきたりて
いのちつゞ
具足ゝゝ色の
しめ上帯きて
馳ちかんの状ちやれ

以代人仰（あお）せの面（とう）を行（ぎょう）ぜしむ

獻蝕左平樂記卷三十五終